

上田流の流勢拡大

中島聖山

札幌の状況

北大農学部 of 学生として、佐伯才一がはるばる広島より札幌へ移住した大正11年当時、札幌には上田流尺八指南として、上田竹童の門人である久慈寛童がいた。

久慈寛童がその当時、上田流尺八の専門師匠として門人の育成や演奏活動を専業としていたとは思えない。というのは、大正11年に上田流宗家事務所が発行した「上田流史」の師匠名簿（准師範以上の職格者が掲載されている）に載っていないからである。また、久慈寛童の渡道目的や渡道年月、北海道における最初の定住地など、彼に対する詳細が不明であり、確定的なことが言えないからである。

これは、当時の流人が既に他界していることと、帯広を実家とする久慈寛童の細君も数年前にこの世を去り、子孫の消息がかめないうことによる。

いずれにしても、久慈寛童は大正後期に渡道し、札幌に定住して上田流尺八を教えていたことは事実である。そして、大正12年春になり、青山呂僮が宗家の派遣師匠として来道し、佐伯才一ら地元流人の支援を受けて札幌を中心に積極的な活動を展開しはじめたため、昭和18年に内田明僮を頼っ

て北見へと移住したのであろう。

このように、久慈寛童と対決する形で札幌入りし尺八指南を開始した青山呂僮は、当初佐伯才一ら流人の世話で居を構え生活していた。しかし、尺八教授だけでは生活していけるはずがなく、札幌市の職員となって測量関係の仕事についた。

来札してまもなく、青山呂僮は自然豊かな北の大地に立った印象を忘れまいと、「美しい里に登る」という心境を胸に『美登里会』を結成し、組織強化と流勢拡大に尽力した。

青山呂僮の人柄に引かれたのであろう。門人の数は急増した。彼が渡道してわずか2年あまりで、門人の数は既に20名を越えるまでになったのである。宗家派遣の師匠として渡道した責を十分に自覚していた彼は、流として未踏の地とも言えた北海道での上田流の普及状況を見てもらうととも、2年半にわたる活動の成果を報告する意味から、大正14年12月には、宗家上田芳僮を招聘して大演奏会を開催した。

2日間にわたった演奏会は、地元系方や立方の支援もあり、大成功に終わった。この時、宗家を囲み、舞台上で記念の写真を撮ったが、写真屋が失敗したため、後日、主だっ

た出演者を集めて写真屋まで行き、そこで記念写真を撮りなおしたという。

演奏会の経験がない門人たちに対する予行練習とも思えるが、宗家を招聘しての大演奏会の前に、大平館において、美登里会の初めての演奏会を開催している。系方や立方の賛助を得ての会であり、上田流にふさわしい賑やかな会だった。



大正14年12月、上田芳僮を招いて

高い芸術論と敬虔な尺八道に燃えていた青山呂僮は、献奏を志し、大正15年から毎年正月には、門人たちを従えて北海道神宮を訪れ、上田流本曲を献奏して、一年の精



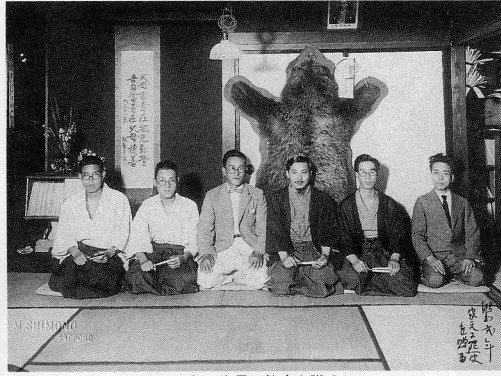
大正14年、美登里会演奏会 於大平館



青山呂僮宅前にて

進を誓うとともに「尺八道、神道に通ず」との自らの芸術に対する姿勢を貫いた。こうして大正15年から始まった北海道神宮の献奏会は、現在もお上田流幹部の有志により継続実施され、青山呂僮が高々と掲げた尺八道の精神が生き続けている。

少しずつ力をつけた青山呂僮は、経済的にも余裕が出来たのであろう、昭和2年には北海道の代表的な獣である熊の皮を宗家に寄贈している。寄贈のいきさつなど詳しいことは不明であるが、この熊の皮が現在も宗家邸に存在するのか確認してみたいと思っている。



昭和2年、家元に熊皮を贈る

帯広地方の状況

上田流の地方拡大は作田呂僮（後に呂僮を名乗った）による帯広方面と、山口呂僮の活躍による追分方面に始まった。

帯広地方における上田流の普及は、宗家実弟で上田流宗家補佐役の上田竹童の門人である久慈寛童の弟子であり、後に青木呂僮にも師事していたと思われる作田呂僮の尽力によるものである。

作田呂僮は昭和2年、十勝農業高校（現在の帯広農業高校）の教師として帯広に移住し、昭和14年までの12年間、帯広で教職のかたわら上田流尺八の教授・普及に活躍した。作田呂僮は同じ教職仲間の庄司篁童

と協力して、演奏活動にも力を注ぎ、地元糸方の温習会等にも積極的に出演して上田流の流勢拡大に努力した。

また、庄司篁童は帯広の駅前で個人病院を開業していた市之川篁壮らを養成し、経済界への尺八普及のきっかけを作った。

このように作田呂僮、庄司篁童、市之川篁壮らの努力により、学校関係、支庁市役所関係、財界関係など、各方面にわたる普及の基盤が整ったことにより、最盛期には帯広管内に40〜50名の流人を抱えるまでに急成長したのである。

しかし、作田呂僮が昭和14年に転勤のため帯広を去り、続いて庄司篁童も転勤となる等、上田流の柱となっていた活動家が相次いで離帯したため、指導者を失った門人たちは、時間の経過とともに流を離れ10数名にまで流人が減少してしまった。

戦後の昭和21年に帯広三曲協会が発足したが、これを契機として庄司篁童や市之川篁壮、坂東陽僮、斎藤吟鈴などが中心になり、消滅寸前になっていた上田流尺八の音楽活動を再開した。

細々ではあったが再開された活動に輩車を掛け、一層発展の途をたどらせた要因には、堀井小二朗の度重なる来帯がある。

堀井小二朗は7孔尺八の名手として名高く、東京を中心に自作の現代曲を演奏して歩くなど、従来の尺八本曲にこだわることなく、時代にマッチした幅の広い音楽活動を展開していた。彼は北海道に知己が多かったとみえ、頻りに来道しては各地で講習会を開催したり、社中の演奏会に出演するなど、上田流尺八の普及発展に一役買っていた。

堀井小二朗が帯広にくるようになったのは、昭和23年頃からであり、知己の庄司篁童を訪ねてであった。彼は余程十勝の大自然に心を打たれたのであろう。「十勝馬唄」「新十勝追分」「とんころ節」「十勝木挽唄」など、十勝をテーマにした曲を何曲も作曲している。

旭川や札幌など上田流の流人がいる土地では、流人育成のための講習会を開き、中央から遠く離れた北海道の流人に、広く勉強の場を与えたのである。

その後、昭和24年になって北見から久慈寛童が移住し、箏曲教授をしていた細君と協力して上田流の再興を試みたが、もとのような流勢は戻らず、彼もまた4〜5年で美幌へ転居したため、再興は不発に終わった。

久慈寛童は相当に吹けた人物であり、細君は山田流箏曲を教えていた。上田竹童の弟子として、主に門人の育成に力点を置き、活動していたようであるが、仕事の関係だと思われるが転居することが多く、札幌・北見・帯広・美幌・函館と道内各地を転々とした。その度に、転居先で門人の育成に当たったため、門人は道内各地に散在するが、まとまった力とはならず、大きな勢力には発展しなかった。

久慈寛童のあとを埋めたのが小西華山である。小西華山は管林局の職員であり、仕事から道内各地を転動して歩いていた。昭和28年に帯広管林局に配属となった小西華山は、衰退していた上田流の再興を図ろうと奔走した。その結果、現在でも帯広三曲協会の幹部として活躍している木村麗山を始め、鈴木吹山など10数人の門人を抱えるまでになった。

堀井小二朗の来道に伴い、帯広では市之川篁壮や坂東陽僮、木村麗山らが、その恩恵をもっとも強く受ける結果となった。特に市之川篁壮は、流本部からその技量を高く評価され、宗家から上田流の最高資格である臥龍斎大師範を許されるとともに、平成元年には地元で十勝文化賞を受賞した。

また、平成3年には地域文化の向上に貢献した業績により、帯広市民文化賞を受賞するなど、北海道の上田流の流人としては、誉とも言える数々の賞を受賞した。

現在は木村麗山が竹簞会を結成し、門人の育成に当たるとともに、音楽活動を続けている。

坂東玉三郎展

'93年2月4日(木)〜3月7日(日)
*火曜日休館*2月22日(月)は臨時休館日

五番館西武日館7階=赤れんがホール



入場料:一般・大学生700円(600円) / 中・高生500円(400円) / 小学生以下無料
*()内は前売・団体10名様以上料金※消費税込み

舞台裏から私的な空間までを、篠山紀信氏撮影の未公開を含む写真約80点や、さまざまな展示物、VTRなどをご紹介します。

坂東玉三郎展も、メンバーズなら入場無料。
赤れんがホールメンバーズ新会員募集

赤れんがホールで開催される美術展、展示会の無料ご招待など会員だけの特典を盛りだくさんに。「赤れんがホール通信」も隔月でお届けします。

お申し込み・お問い合わせ

日館7階=赤れんがホールメンバーズ ☎011(251)0111 総合案内

五番館
SEIBU
火曜日定休 電話 011(251)0111 総合案内



小西華山師(夫妻)と門人

北見地方の状況

北見地方における上田流の開拓は、久慈寛童の門人である高橋宇山に師事した、内田明童の活躍によるものである。

内田明童は昭和15年まで遠軽町に住み、上田流尺八の普及に努めていたが、高橋宇山に関する資料が皆無なため、いつどこで高橋宇山から上田流尺八を学んだのか不明である。

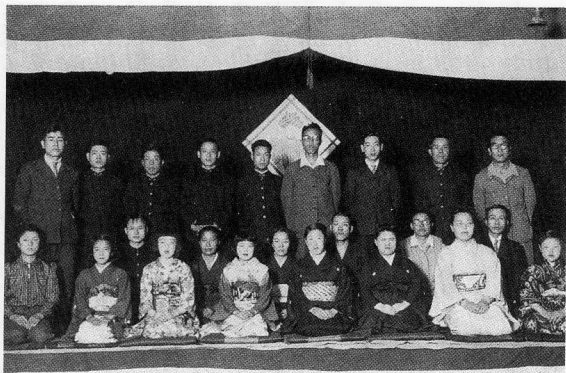
しかし、高橋宇山の弟子たちが北見地方を中心に活動していること、高橋宇山が師事した久慈寛童が札幌在住であったことなどから、次のような推測が出来る。札幌で久慈寛童に上田流尺八を学んだ高橋宇山は、北見地方に移住し内田明童らに尺八を教えた。そして、北見地方にも長く滞在すること無く本州へと転居していったのではないだろうか。

遠軽で門人の育成に当たっていた内田明童は、昭和15年に北見へ移転し、活動の本拠地を道東の中核都市である北見へと移したのである。内田明童の努力によって、道東における上田流の基盤は次第に整っていった。しかし、仕事との両立や流勢拡大に対する力量などを考えたのだろうか。昭

和18年には札幌から久慈寛童を北見に招いている。札幌の基盤は青木呂童に押さえられていたので、久慈寛童にとってこの話は幸運だったに違いない。もしかすると久慈寛童から持ちかけた話だったかもしれない。

いずれにしても、専門師匠としての久慈寛童が北見に転居したことにより、道東における上田流の流勢は強化されることになった。久慈寛童は内田明童が築き上げた地盤を受け継ぎ、北見を中心に美幌町や津別町へも出稽古して、勢力拡大に努めた。戦争も終わり、社会的な落ち着きとともに門人も次第に増え始めた。そして昭和22年6月14日には、竹社会主催の演奏会を、北見で開催している。門人の中に、国鉄の職員が多かったとみえ、鉄道集会所で演奏会を行っている。

流勢の安定とともに自信を持った久慈寛童は、昭和22年に大阪より恩師である宗家補佐役の上田竹童を招聘して、講習会を開催したのである。当然のことながら、演奏活動にも力が入った。特に久慈寛童と内田明童のコンビは、道東における上田流を象徴するかの如くであり、昭和22年にはNHKラジオを通じ、道内の邦楽ファンに上田



新憲法施行記念上田流尺八竹社会演奏会昭和23年5月

流本曲の妙味を披露した。

さらに昭和23年5月25日には、北見の商工会議所ホールで、竹社会主催の新憲法施行を記念する演奏会を行った。この会には地元の方として、生田流正派の石川社中が賛助出演した。

しかし、こうした北見地方における上田流の流勢拡大も、昭和24年に久慈寛童が北

見を去り、帯広へ転居することにより下火となった。久慈寛童の転居後は、美幌や津別の出張稽古も含め、内田明童が上田流の地盤を守ることになったが、職務が忙しくなってきたこともあり、おしくも昭和27年には、尺八指南を中止してしまった。指導者を失った竹社会は次第に勢力を弱め、都山流の流勢に押されることとなった。

上田流系図 (北海道地区)

